

中国地方民間神楽における「白い布」

三村 泰臣*

(平成22年11月1日受付)

A Study of “White Cloth” in “Kagura” around the Chugoku Region

Yasuomi MIMURA

(Received Nov. 1, 2010)

Abstract

Folk ritual “Kagura” is the nucleus of Japanese folk ritual tradition, which is one of the ethnic arts people have expressed in their life. We often observe white cloths in folk rituals or folk ritual “Kagura”. By investigating and analyzing many examples of the white cloths used in East Asian countries, we can clarify not only the formation and development of Japanese “Kagura” but also its fundamental meaning. In this article, the author reported some examples of white cloths that he observed in the Chugoku region and East Asian countries.

Key Words: the Chan Jiang River, the Inland Sea, Kagura, South Korea, white cloth

はじめに

日本民俗学を開始した柳田國男は『遠野物語』の序文に、家々の軒に掲げられた白い布の風景を描写している。日本人の魂の根源がこの白い布に隠されていると予感してのことだったのであろうか。筆者は過去三十年にわたり日本や東アジアの民間祭祀を探訪してきた。その中で最も印象的

で記憶に新しい事例が二つある。一つは広島県庄原市西城町平子で行われた「仲屋名本山三宝荒神大神楽」(写真1)¹、もう一つは中国・長江中流域で行われた「大道場」(写真2)²である。いずれも地域外の者が入ることを許されていない一族一党の行事であった。そこで使われていた一本の白い布に魅きつけられた。長い白い布を肩にかけた祭主がその布を打ち振りながら神がかりしたり、神々や先



写真1 「仲屋名本山三宝荒神大神楽」(庄原市西城町平子)。



写真2 「大道場」(重慶市西陽土家族苗族自治州小河鎮桃坂村)。

* 広島工業大学環境学部環境デザイン学科

祖の霊を呼び降ろしていた。白い布には自然を越えた何か不思議な力が宿っているのではないかと予感したのであった。

本稿は中国地方各地と東アジアの民間祭祀で筆者自身が目にした白い布の事例報告である。簡単な報告に過ぎないが、日本人の魂の根源を解明する出発点になるのではないかと思う。この事例を基にした白い布に関する考察は筆者による別論文を参照いただきたい³。

1. 中国地方民間祭祀の「白い布」

中国地方の民間祭祀の様々の場面で白い布を見ることができる。山口県周防大島町久賀の法王山阿弥陀寺で毎年行われる「二十五菩薩練供養」は白い布を張り渡した拝殿で法要を行い、二十五人の菩薩たちが白い布を引いて墓所まで行列し流れ灌頂する（写真3）⁴。岡山県笠岡市の仏松山海蔵寺大仙院では盆の縁日に本尊から水向け地藏まで白い布（善の綱という）を張り、それに銭を結んで手向けするという⁵。白い布は仏教儀礼の中で死霊供養のために使われているようである。

民俗儀礼の中でも白い布は観察される。備後沼隈郡浦崎村（現尾道市浦崎町）では死者に白い布で作った一重服を着せ、遺族たちは白い布を首からかけ死者を吊っていたという⁶。先に挙げた遠野地方の白い布は、新仏が出た家で三年間竹や杉の木に白い布を下げる盂蘭盆の習慣で（子どもや女性が死んだときは白布でなく紅布を下げる）、ここでも白い布（紅い布）は死霊供養のため使われているようである⁷。

白い布は生き物たちの供養にも使われていたようである。備後地方で行われる供養田植は稲の豊作を祈願し牛馬を供養することが目的である。庄原市東城町塩原で四年おきに行われる「大山供養田植」では、左下という男性囃子



写真4 「大山供養田植」（庄原市東城町塩原）；白い布を結んだ縮太鼓を打つ左下。

手たちが白い布で結んで肩から下げた縮太鼓を打ち、早乙女たちが華やかな田植をする（写真4）⁸。

日本一の大神である出雲大社で毎年十一月に行われる「神在祭」でも白い布が使われている。神職たちは稲佐の浜に迎えた諸国の神々を白い布で囲み、龍蛇神を先頭に本社へ行列し、本社両側の十九社に鎮齋している。中国地方の例ではないが、東大寺二月堂のお水取り行事の最後に行われる「ダツタン」で火を持った二頭の鬼が床を踏み締めながら力強く舞うが、そのとき内々陣と内陣の間に下げた一枚の白い布が引き上げられる⁹。民間祭祀や神道／仏教儀礼を見ると、白い布は聖なる力を顕現させ、この世とあの世をつなぐ表象物として使われているようである。

2. 中国地方民間神楽の「白い布」

白い布は民間祭祀や神道／仏教儀礼で観察することができるが、とりわけ民間神楽の中で多く目にするのできる。特に中国地方の民間神楽で白い布を使う例が多い。筆者が観察しえたものをここに幾つか紹介しておきたい。

(1) 神楽祭祀で使われる「白い布」

旧石見国や安芸国でよく演じられる「大江山」で、鬼に捉えられた姫が白い布や紅い布を手にして舞うことがある。また備中神楽や豊松神楽の「吉備津能」では白い布が細谷川に見立てられたり（写真5）、「お田植え」では水田とみなされたりする。出雲神楽大成以前から行われていたと考えられる奥飯石神職神楽の「手草の舞」では、榊の元につけた一メートルもある白い布を舞手が打ち振り、膝を折りながら美しい舞をする。こうした事例は神楽の単なる演出に過ぎないように思われるが、もしかすると白い布が特別な意味をもって使われていた名残であるかも知れない。

白い布は神楽の色々な場面でも使われている。たとえば



写真3 「二十五菩薩練供養」（山口県周防大島町久賀）；白い布を引く菩薩たち。



写真5 「吉備津能」（豊松神楽・福山市加茂町百谷）；細谷川に立立てられた白い布。



写真7 「ミサキの舞」（旦の十二の舞・山口県防府市大字大道）；三本の白い布を握って舞う。



写真6 白い布で口を覆い御神体の荒神を白布で包み祭場に迎える（庄原市東城町粟田）。



写真8 「柴鬼神」（岩国行波の神舞・岩国市行波）；白い布（善の綱）に銭を結ぶ舞子たち。

国指定無形民俗文化財の比婆荒神神楽（広島県庄原市東城町と西城町に伝承）では、十三年あるいは三十三年に一度行う大神楽おおかくらで白い布がよく使われる。荒神祠から御神体の荒神を迎えるとき、神職たちは白い布で口を覆い、その荒神を白い布に包み丁寧に祭場へお迎えする（写真6）。それを神殿に安置し荒神のまわりに白い布を張り巡らす。

同じ国指定の無形民俗文化財の三作神楽（山口県周南市和田に伝承）も荒神を白い布に包み迎えている¹⁰。そして「三方荒神の舞」では三本の白い布を神殿の天井から下げ、それを三名の舞手たちが互いに握って舞いながら一本の白布の綱にない、その綱に登って降りてくる。旦の十二の舞（防府市大字台道に伝承）で十年に一度行われる「ミサキの舞」でも、同じように天井から下げた三本の白い布を舞い手たちが握って舞う（写真7）¹¹。

また国指定無形民俗文化財である岩国行波の神舞（岩国市行波に伝承）の「柴鬼神」でも白い布が使われている。神棚に置いてあった白い布を、そこから神殿の反対側まで引き延ばし、その白い布を挟んで鬼と奉事が打ち合いする。その後で舞子や氏子たちがその白い布（当地ではこの白い

布を「善の綱」と呼んでいる）に銭を包んで供えていた（写真8）。神殿の先に柱松を立て、その間に白い布を敷いて「八関」という神楽も行われる。同じような習慣は同じ岩国市の藤生神楽¹²をはじめ、周防神舞地帯でしばしば見ることができる。

瀬戸内海を挟んだ伊予の川名津神楽（愛媛県八幡浜市に伝承）では、最後に行われる「柱松登り」で松明を背に負った大魔という舞手が柱に登り、柱の天辺から曳いた三本の綱に白い布を掛けていた（写真9）。また讃岐の伊吹島の三宝荒神社で行われる伊吹の神楽（香川県観音寺市伊吹町に伝承）は境内に竹柱を立て、その先に三本の開き扇を結びつけ、そこから二本の長い白布を垂らし、その祭場で神楽を行っている（写真10）。このように白い布は瀬戸内海を挟む中国地方や四国地方の民間神楽に登場するのである。白い布は神楽の祭場や祭式で使われているが、特に目立つことはそれが湯立と神がかりする神楽で使われていることである。

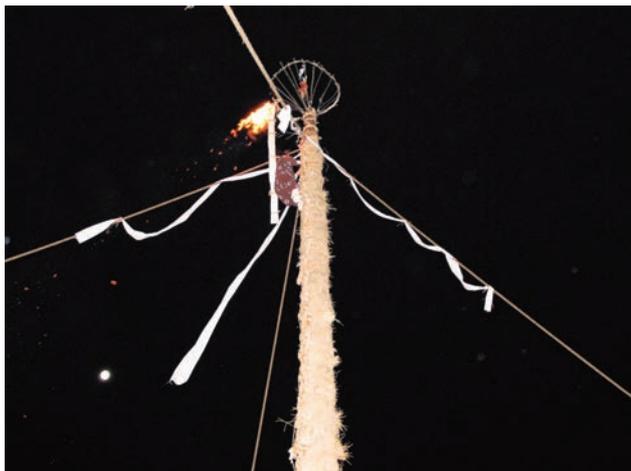


写真9 柱に登った大魔が綱に白い布を掛ける（愛媛県八幡浜市川上町川名津）。



写真11 神楽は白い布に湯を通す湯立行事から始められる（山口県周南市和田）。



写真10 竹柱から白い布を下げた祭場（香川県観音寺市伊吹町）。

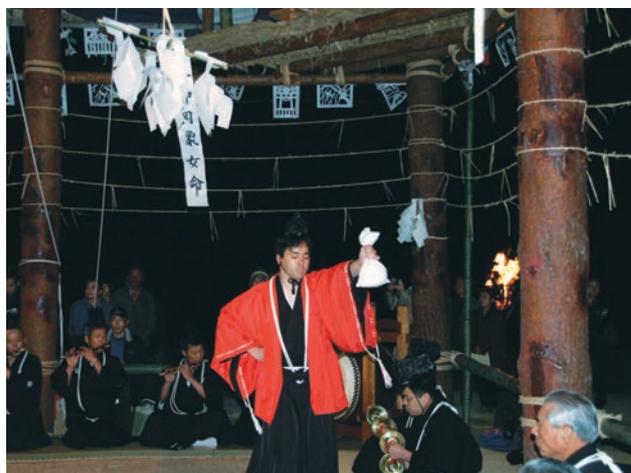


写真12 米など入れた巾着様の白い布の袋（トビ）を採って舞う（岩国市行波）。

(2) 湯立で使われる「白い布」

中国地方の神楽には湯立と呼ばれる神事が各地に残っている。この湯立で白い布が使われる。湯が沸くと白い布を広げて張ったその上に祭主が湯を通す（写真11）。これを「湯渡し」という。比婆荒神神楽や大元神楽では式年の神楽の最初にこの湯立を行う習慣がある。

今でも忠実に湯立を実行しているのが周防神舞である。その典型とされている岩国行波の神舞は、前夜に神殿中央に漏斗型の釜を据え湯渡しを行い、その後で「湯篠^{ゆしの}」や「湯立舞」など優雅な舞を奉納する。そして最後に米など入れた白い布の袋（巾着様の袋で「火のトビ」という）を採って「火鎮の舞」をする（写真12）¹³。

瀬戸内海を挟む旧讃岐国に珍しい湯立神楽が幾つか残っている。その一つ、香川県仲多度郡まんのう町長尾の三島神社で行われる秋季祭礼前夜に、神社境内に掘立て柱の柵（方二間、高さ七尺五寸）を組み、柵の周囲に高さ二丈もある青竹（「斎竹」という）を十二本立て、その先端から二本の長い白布を垂らし、粘土で築いた高い湯釜の前に板製の舞台二枚敷いた上で十二番前後の神楽が奉納される



写真13 十二本の青竹から白い布を下げた祭場（香川県仲多度郡まんのう町長尾）。

（写真13）¹⁴。神楽奉納後に湯立が行われ、祭主がご神体を湯で清め氏子たちをもその湯に与る。そして最後に火渡り神事を行い「鉦の舞」で舞い納める。完全に神道化された行事にはいるが、御神体を移す時は柵に上る道に白い布を敷くなど、今も白い布を使っていた名残が生き生きと保たれている。白い布には湯を清めたり火を鎮める威力

だけに限らず、様々な機能が込められていたのであろう。

(3) 神がかりする神楽で使われる「白い布」

白い布は神楽の祭場／祭式や湯立に使われるが、神がかりする神楽の重要な道具として使われている。備中荒神神楽(岡山県西部の旧備中国に伝承)では最後に行われる「託宣舞」で白い布が使われている。一メートルほどの竹の棒の先に白い布を結び付け、その白い布をクルクル回しながら舞ううち舞手が神がかり(写真14)。その舞手を天蓋下に座らせ、米占いによる託宣を伺う。別の地域では白い布を柱から柱へ張り渡し、その下で「ゴーヤ、ゴーヤ、ゴーサンヤ」と唱えながら廻り神がかりすることもある¹⁵。

これとよく似た形が備後神楽の「荒神舞」(広島県世羅郡世羅町に伝承)でも見られる。白い布の襷をかけた三名の舞手が祭場に斜交いに張った二本の白い布の下でクルクルと激しく舞っていると突然神がかりする(写真15)¹⁶。この舞は瀬戸内海沿岸地域で「妙見舞」と言われていた。三原市で行われる妙見舞はその代表例で、伊吹の神楽と同じように大きな竹柱から白い布を下げ、その下を氏子たちが廻っていた。同じことは尾道市瀬戸田町の名荷



写真14 白い布をクルクル回しながら神がかりする「託宣舞」(岡山県高梁市成羽町麻操)。



写真15 白い布を爪繰り激しく舞って神がかりする「荒神舞」(世羅郡世羅町津口)。

神楽でも行われていた記録が残っている¹⁷。

備後の比婆荒神神楽(広島県庄原市に伝承)では「土公神迎え」と「土公神遊び」、「荒神の舞納め」で白い布を使った神がかりがある。土公神迎えは白い布を手にした舞手が当屋の台所でそれを打ち振りながら神がかりし土公神を迎える。続いて行われる土公神遊びでは、複数の神職たちが白い布を互いに肩にかけてつながり、米占いで託宣をする¹⁸。また荒神の舞納めでは浄衣の舞手(神柱という)が藁蛇にとりつき、白い布(手草という)を激しく打ち振りながら神がかりして絶叫する(写真16)。その白い布はユグリといわれる藁製の籠に入れ荒神祠の床下に埋納される。このように、白い布と神がかりの間には強いつながりがあるようである。

大原神職神楽(島根県雲南市大東町に伝承)の三十三年毎に行われる荒神神楽でも白い布を使う神がかりの「託宣神事」が伝えられている¹⁹。神殿から仮柱(幣殿と拝殿の境に立てる仮の柱)に引き渡した白い布(託綱という)の下で、託台が神がかりし託宣する。同じ島根県の大元神楽(島根県西部に伝承)の託宣は、藁蛇を白い布で吊り下げそれを激しく揺する中で神がかりが発生する²⁰。隠岐神楽



写真16 藁蛇に掛けた白い布を振って狂い舞いし神がかりする神柱(庄原市西城町平子)。



写真17 三本の白い布で結んだ米俵を遊ばせる「山舞」(島根県鹿足郡吉賀町抜月)。

の夜明け前に行われる「注連行事」で巫女が神がかり、米俵に腰掛け託宣する。これとセットで行われる「布舞」は、一反の白い布を舞手が手に採って舞う。神歌に従い布に結んだ紐（一尺五、六寸）を解いたり、白い布を身体に巻き付けたり、その白い布を手繰り両手に持って舞うという²¹。

抜月神楽（島根県鹿足郡吉賀町六日市に伝承）の「山舞」では三本の白い布を結んだ米俵（元は米俵でなく榊枝などの束であった）を引いて激しく遊ばせる（写真17）²²。以前はここで神がかりが発生していたようである²³。安芸十二神祇の「將軍舞」では石帯という長い白布で刀や幣や幡を結びつけ、舞手が弓を採って激しく舞って神がかり²⁴。このように中国地方の民間神楽では、白い布と神がかりが強く連動していることが確認できる。

白い布は瀬戸内海を挟んだ環瀬戸内海における民間神楽でよく観察することができる。神を迎えたり、湯立や神がかりする神楽と表裏一体で使われている。この湯立や神がかりの神楽はいずれも一般的な神楽でなく、七年、十三年、三十三年など特別な年に行われる荒神神楽祭祀の一祭式である。こうした特殊な神楽で使われている白い布を追究すれば、湯立や神がかりが何であるか理解できるだけでなく、白い布をよく使う荒神祭祀が何であるかということも解明することができる。更に民間神楽そのものも解明できるに違いない。

3. 東アジア民間祭祀の白い布

白い布は日本の民間神楽（荒神神楽祭祀）でよく使われているが、日本だけでなく東アジアの民間祭祀でも使われている。筆者は二〇〇四年以来継続的に韓国と中国長江中流域三角地帯の民間祭祀を調査してきたので、その事例をここに紹介しておきたい。

(1) 韓国の白い布

民俗芸能学者の本田安次は民間神楽に使われる白い布について論じている。その中で韓国全羅南道珍島の「コプリ」について触れている。コプリは死霊祭祀で行われるクツ（日本の神楽に相当）の一つで、白い布に七個または九個の結び目を作り、巫女（タンゴル巫）が歌舞しながらその結び目を解いていく。当地でこれは恨を解くために行うと信じられている²⁵。

このコプリに限らず、韓国の民間祭祀では白い布が実によく使われている。京畿道西海岸の仁川港周辺では大漁祈願のため「豊漁祭」が韓国北部地方の巫堂（ムーダン）たちによって行われている²⁶。船上の祭場に長い白布を張り様々なクツが行われる。白い布を網に結びそれを引き上げ

たり、長く張った一本の白い布を体で裂き体に巻き付けさせるなど緊迫した演技が行われた（写真18）。遭難死亡した漁師たちを供養する願いがその根底にあるように思える祭りであった²⁷。

江原道東海岸の江陵市では毎年端午の期日に大関嶺山神（大関嶺国師城隍神／大関嶺国師女城隍神）を迎えて「端午祭」が行われる²⁸。四本の白い布を結んだ楓の木を南大川の河原に建築した仮小屋に移し、そこで十曲ばかりのクツが連日に渡り演じられる。「將軍クツ」（チャンゲンクツ）は三台の重い真鍮製の容器（ノッドンイ）を白い布で締め、それを巫女が口にくわえて將軍神と巫女の威力を誇示する（写真19）。これは戦争で亡くなった人を供養するためのクツとも言われている。また最終日に行われる「船の唄クツ」（ベッコレクツ）は飾り立てた一艘の竜船に白い布を結びつけ、それを揺り動かしながらムーダンの歌舞にあわせ引いていく。神々を送るために行うと考えられているが死霊を送ることがその根底にある。

本年九月に済州島を訪れた際、済州道民俗自然史博物館でヨンドンクツ（霊登祭）の祭場展示を見学した（写真



写真18 白い布を裂く巫堂（ムーダン）と豊漁祭の祭場（京畿道仁川広域市）。



写真19 白い布で締めた金盃をくわえて持ち上げる巫堂（江原道江陵市）。



写真20 竹柱から白い布を下げた霊登祭の祭場（済州道民俗自然史博物館）。

20)。このヨンドンクツで重要な装置は白い布とそれを巻き付けた竹竿である。六メートルもあるこの笹付きの竹竿の天辺に白い布を巻いた輪と竹棒（両端に竹笹を残す。両端に白紙の房を付け切紙を下げる）を付け、その竹棒の両端から三メートル程の長さの白布の幡を下げていた。竹棒の中央からは（中に五色の布を入れてある）白紙で作った筒状の幡を下げていた²⁹。この竹竿から一本の長い白い布が祭場の神座まで曳き伸ばしてあった³⁰。

(2) 長江中流域の白い布

中国長江中流域三角地帯（湖南省、貴州省、四川省にまたがる山岳地帯）の苗族や土家族などは、今でも実際に白い布を使って各種の民間祭祀を行っている³¹。土家族の「打繞棺」といわれる葬祭は祭場正面に白い布を張り渡し、中央の棺桶の周りで巫女たち（道士という）が鑊（鉦）、哨吶（ラッパに似た楽器）、ホラ貝などの楽器を奏で、順逆に廻り歌舞をしながら死者を清める。遺族たちはみな頭に白い布を被って垂らし、長い場合は七日七夜に渡りこの死



写真21 白い布を飾り目連の故事を歌誦し死霊を清める（重慶市小河鎮桃坂村）。

者清めの遊びをする。天若日子を弔うため行った日本古代の神遊びに酷似する祭りである。

同じ土家族の「道場」といわれる死霊祭祀では、長い場合は二週間にもわたり毎日読経を繰り返して死霊を清める³²（これを「大道場」という）。この死霊祭祀でも白い布が頻繁に使われている。五方を清める「結界伏魔」、釈迦の弟子である阿難尊者を迎える「迎真」、地獄破りの「游城」、死霊を子孫の元へ迎える「接亡」、目連の故事を歌誦しながら死霊を清める「目連齋」（写真21）、死霊の罪が赦される「放赦」、上元・中元・下元の神を迎える「接駕」（写真22）など、様々な場面で白い布が使われる。苗族の死霊祭祀「除霊」は祭場の正面に大きな白い布（孝彩／財という）をかかげて行う。覘たちが蘆笙を奏でると、頭から白い布（孝帕という）を冠った遺族たちが慟哭しながら死霊たちに歌を捧げ慰める（写真23）。

長江中流域三角地帯の民間祭祀（打繞棺／道場／除霊）で白い布は祭儀の中心的シンボルとして使われていた。白い布は葬祭や死霊祭祀など死者や死霊に関わる重要装置であることを暗示している。また白い布はあの世とこの世を



写真22 三元神を迎える「接駕」（重慶市小河鎮桃坂村）。



写真23 白い布の下で慟哭し死霊を慰める遺族たち（重慶市万盛区興隆鎮大場村）。

結ぶ橋の役割りを果たし、死霊を清めるため特別な力を発揮する装置としても使われている。また「結界伏魔」で白い布に一握りの米を入れて五つのコブをつくり、そのコブを「焼霊」の前に解き結縁を切る道具としても使っていた³³。

(3) 東アジア民間祭祀の白い布

白い布は日本の民間神楽の中で観察することができるが、韓国や長江中流域三角地帯の葬祭や死霊祭祀でも観察できる。この白い布を使う習慣はいつの頃から東アジアで始まったと考えたらよいのであろうか。この疑問に答える興味深い仏教絵画を筆者は中国甘肅省酒泉市の榆林窟でたまたま目にする事ができた³⁴。第二十五窟南壁にある中唐期の「観無量寿経変図」に白い布を手にしてつながる阿弥陀仏と菩薩たちが描かれていた(写真24)³⁵。これと同じ白い布を手にした浄土図は敦煌莫高窟に皆無であるということであったので³⁶、白い布は西アジアでなく東アジアの表象物であったことを示している。このことから白い布は中唐期以前から葬祭や死霊祭祀の重要装置として中国文明圏で使われてきたと考えられる。もしかしたら白い布は既に長江文明が繁栄した時代の葬祭や死霊祭祀で用いられていたかも知れない。その白い布が長江流域や朝鮮半島、日本列島など東アジア全域で今もその名残を止めているのであろう。

おわりに

中国地方各地の民間神楽祭祀で使われている白い布は韓国や長江中流域の民間祭祀と深いつながりを持っている。この白い布が韓国や長江中流域で葬祭や死霊祭祀で今も使われていることを考慮すると、白い布が使われる中国地方の民間神楽も葬祭や死霊祭祀に基礎づけられていると考えることができる。白い布を使う民間神楽には湯立や神がか



写真24 「観無量寿経変図」(榆林窟第二十五窟・甘肅省酒泉市)。(『敦煌石窟の珍品』より転載)

りがあり、荒神神楽祭祀とも連動していることから、これらは葬祭や死霊祭祀を基礎に成立・展開したと考えられよう。この詳細については改めて考察したい³⁷。

本稿は2008年度から2010年度まで三ヶ年間、文部科学省科学研究補助金(基盤研究C)による研究(研究課題名:東アジアの「白い木綿布」に関する民族芸術学的研究)成果の一部である。調査に協力していただいた関係各位に深く感謝申し上げたい。

参考文献

- 1 三村泰臣『広島神楽探訪』133～139頁、南々社、2004年。
- 2 三村泰臣・王倩予「長江流域の死霊祭祀—重慶市酉陽土家族苗族自治县小河鎮桃坂村の「大道場」—」『民族藝術』VOL.22, 100～107頁(2006年)。
- 3 三村泰臣「日本民間神楽の「白い布」」『宗教研究』83巻363号, 489～499頁(2010年), 等。
- 4 2004.4.27, 2010.4.27. 参観。これと同じ「練供養」は誕生寺(岡山県久米郡久米南町, 2009.4.19. 参観), 千手山弘法寺(瀬戸市牛窓町, 2009.5.5. 参観)などでも行われ白い布が使われている。また御調八幡神社(広島県尾道市御調町)には練供養に使用していた菩薩面が保存されており、当地でもかつて練供養が行われていた。
- 5 高橋秀雄編『祭礼行事 岡山県』110～111頁, おうふう, 1995年。
- 6 平山敏治郎他編『日本庶民生活史料集成 第九巻 風俗』761～769頁, 三一書房, 1969年, 参照。鹿児島県南部地方の葬儀でも白い布を首に掛けたり肩に掛けたりする。全国的に行われている習俗である。
- 7 背中にたくさんの白紙の毛をつけて舞う遠野の獅子踊は、狩で犠牲になった鹿を供養する芸能だが、残された人が亡くなった人を慰める踊りでもあるという。
- 8 2002.5.26, 2009.5.31, 2010.5.29, 参観。
- 9 2010.3.14. 参観。
- 10 2006.5.3～5. 防府市野島の荒神祭(矢立神社)で確認。
- 11 山口県教育委員会『山口県民俗芸能緊急調査報告書 山口県の民俗芸能』37～39頁, 山口県教育委員会, 2000年, 参照。2001.9.30. 繁枝神社で参観。
- 12 2009.11.8. 参観。岩国市藤生の田圃で行われた七年祭。
- 13 周防地方の湯立行事については, 三村泰臣「周防の湯立行事」『山口県神道史研究』15号, 1～19頁(2003年), 参照。
- 14 三隅治雄他編『四国地方の民俗芸能 1 香川』137～141頁, 海路書院, 2006年, 2010.10.12. 参観。演奏曲

- 目は榊の舞、幣の舞、鈿女の舞、篠の舞、弓の舞、劍の舞、杖の舞、狸々の舞、市立の舞、鉦の舞である。
- 15 牛尾三千夫『神楽と神がかり』334頁、名著出版、1984年。
- 16 備後府中荒神神楽の「布の舞」は白い布を蛇にかけ、比婆荒神神楽の土公神遊びと同じように米占をする(牛尾、前註、343頁)。
- 17 藝能史研究会編『日本庶民文化史料集成 第一巻 神楽・舞楽』247～268頁、三一書房、1974年。
- 18 「荒神遊び」なども同じように白い布を肩にかけて行う。備後の「弓神楽」は四季荒神祭という荒神祭祀である。白い布を肩に掛けた祭主が弓を打ち最後に神がかった。
- 19 島根県古代文化センター『島根県古代文化センター調査研究報告書8 大原神職神楽』31～33頁、島根県古代文化センター、2000年。
- 20 2006.11.18. 江津市桜江町市山飯尾山八幡神社で参観。
- 21 牛尾三千夫『神楽と神がかり』248～249頁、名著出版、1985年、参照。
- 22 2000.10.28. 参観。
- 23 同様の舞は山口県岩国市本郷町波野で「山之神」と言い、幣串を束にして菰で巻いて縛ったヤマの周りで四名の白衣の舞手が狂い舞する。同様の舞は広島県廿日市飯山の湯立神事に「山を舞う」という舞が伝えられている。
- 24 廿日市市原にある伊勢神社で行われる。1996.10.12、1997.10.11、2006.10.7、参観。
- 25 崔吉城『恨の人類学』平河出版社、1994年、参照。この結び目を解くことは、後に述べる長江中流域の死霊祭祀でも見られ、縁者と結縁を切るために行われていることから、コプリも同じ目的で行われたのではないかと考える。
- 26 2007.9.8～9. 調査。仁川広域市仁川港で金錦華(韓国文化財)らによって行われた。
- 27 この布を裂くクツは全羅南道や慶尚南道で「裂布」と言われ、死霊をあの世へ送るため行うという。
- 28 2010.6.13～17. 調査。金徳起編『江陵の無形文化財』江陵市文化観光福祉局、2004年、参照。
- 29 この筒状の幡の上部中央に二袋の米を入れた白い布の袋が取り付けてあり、その幡に結んだ一本の綱は滑車を通してあり上下左右に引き動かせる仕掛けになっていた(日本の神楽の天蓋引きのようなことが行なわれるのかも知れない)。
- 30 これは隠岐で明治初年までおこなわれていた霊祭神楽の祭場と類似している。韓国の民間祭祀で使われる白い布はどれもその根底に死霊供養の伝統が窺える。韓国の民間祭祀で使われる白い布は讃岐地方の民間神楽(伊吹の神楽、三島神社湯立神楽)の祭場とも類似している。そのため環瀬戸内海の民間神楽は死霊祭祀を起源としているに違いない。
- 31 三村泰臣・王倩予「長江流域と環瀬戸内海海域における民間神楽祭祀の実証的比較研究」『財団法人JFE21世紀財団 2008年度大学研究助成アジア歴史研究報告書』19～26頁(2009年)。
- 32 三村泰臣・王倩予「長江流域の死霊祭祀－重慶市酉陽土家族苗族自治州小河鎮桃坂村の「大道場」－」『民族藝術』VOL.22、100～107頁(2006年)。
- 33 これは韓国珍島のコプリと非常によく似ていた。コプリは恨を解く祭儀と言われているが、道場の白い布と比較すると、コプリはむしろ結縁を切る願解きの祭儀と考えた方がよいのではなかろうか。
- 34 2008.9.18. 調査。
- 35 『敦煌石窟珍品』129頁、香港廣彙貿易有限公司、2002年。
- 36 敦煌莫高窟研究所によると、莫高窟に白い布を手にする浄土図は無いということであった。
- 37 この一部は三村泰臣『中国地方民間神楽祭祀の研究』岩田書院、2010年、第二部「中国地方の荒神神楽祭祀」で触れているので参照して頂きたい。

